

福祉系

対人援助職養成の

現場から^④

西川 友理

施設実習が、怖い！

もうすぐ社会的養護関係の児童福祉施設（児童養護施設や乳児院）に実習に行く学生達を対象に、事前学習として、授業で児童養護施設のドキュメンタリー番組のビデオを見た後の事です。

「先生、わたし、実習怖くなってしまいました」という学生。

「怖いって？」

「あんなふうな、立派な先生になれるか、と思うと……。あんなに素のままですつ

かってくる子どもと、上手に対応できるかと思うと……」

「いやいやいや、別に、実習の時から立派な先生になってたり、上手に対応出来たりするんやったら、実習なんかいらんでしょ。」

「確かにそうなんですけど…なんか、色々と怖いです…」

「じゃあ次の授業では、何が怖いのか、考える時間にしましょう。それはそれとして、実習では、出来なくて当たり前だからね。沢山経験して沢山失敗していから、多くを吸収してきて下さい

ね！」

保育士養成校での、児童福祉施設での実習の事前学習として、その授業内容には少し工夫が必要です。とにかく、現場の実態をどこまで伝えるのか、そのさじ加減が難しいのです。

法律や制度を覚え、理解する事など、システムに関する学びだけだと社会的養護の実態が見えてきません。もちろん、法律、制度、システムなどは実習に行く前にぜひとも理解しておいてほしいところであり、施設は確かにそれらのシステムの上に成り立っている者ではあるのですが、実際の実習は、子ども達や職員の方々とのコミュニケーションの中で展開されます。ですから、子ども達や職員の方はどんな方がいらっしゃるのかという事を理解していかないといけません。

かといって、入所している子どもの状況について理解を深めてもらおうと入所児の体験談を読んだり、施設の子どものドキュメンタリー番組を見せたり、といったことにウェイトを置くと、感情を揺さぶられることが多く、そのような授業は前後の指導を上手にしないと、単純にふりまわされるだけの時間になってしまうこともあります。なるべく現場の実態に近いものを、と考えて見せた番組の内容のリアルさに、圧倒されることもあります。絶対必要な学びではあるのですが、この部分のさじ加減がいつも難しいと感じています。

そして毎年、かなりの学生が「怖い」と訴えます。この「怖さ」の理由は「生々しい感情が発露されるかもしれない場

所に行くのが怖い」「自分自身が中高生の時にいじめられたことがあるから、中高生とうまく関われないと思う」「普段中高生と話をしないから、何を話したらいいかわからない」「自分の色んなものを試されている気分になる」など様々です。さらには「何が怖いかわからないけど怖い」という漠然とした不安も出てきます。

確かに保育園や幼稚園は学生の多くが利用者として体験してきた経験がある一方、児童養護施設や乳児院を入所児として経験してきた学生は本当にわずかです。また、特に短期大学の学生の場合、ほんの1年前まで高校生だった、というような状態で、中高生も生活している児童養護施設に実習に行く学生などは、どういう立場でそこに居ればわからないというのが正直な本音のようです。他者とのコミュニケーションに自信がない学生などはなおさら頭を抱えます。

「保育実習Ⅰ（施設）」という

実習科目

保育者を志望して養成校に入学する学生は、その大半が保育所や幼稚園の先生になりたいと考え、実習も当然そのようなところで行うと考えています。しかし、保育士になるための実習には必ず「保育実習Ⅰ（施設）」が課せられています。これは保育所以外の、保育士に関わる福祉施設における実習プログラムであり、養成校によっては、保育士養成

課程に課せられているいくつかの実習のうち、学生が初めて経験する実習に設定されていることも少なくありません。法的には「乳児院、母子生活支援施設、児童養護施設、障害児入所支援施設、児童発達支援センター(児童発達支援及び医療型児童発達支援を行うものに限る)、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所(生活介護、自立訓練、就労移行支援又は就労継続支援を行うものに限る)、情緒障害児短期治療施設(西川注:現在の児童心理治療施設)、児童自立支援施設、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園」が実習先として許可されています。

私は、この「保育実習Ⅰ(施設)」の実習で児童養護施設や乳児院に行く養成校しか勤務したことがないのですが、成人の障害者施設などを主な実習先としている養成校では、抵抗を示す学生がかなりいるとのこと。「成人の障害者の人なんて、今まで接したことがない」「どう接したらいいかわからない」「そんなところで実習するなんて、全然想定していなかった」と、やはり学生から不安を訴える声が出てくるし、時には保護者からも連絡が来ることもある、と、当該養成校の先生からお話を伺うこともあるほどです。

障害者支援施設および指定障害福祉サービス事業所で働くための資格として生活支援員というのがありますが、これになるために特に保育士資格が必要というわけではなく、またその他の資格も特に必要とされてはいません。しかし、保育士の実習対象施設に入っている以

上、成人の障がい者についての学びをきちんと設定しないといけないと思うのですが、現在の保育士養成のカリキュラムにはそれはほとんど入っていません。障害福祉サービス事業所には確かに15歳や17歳といった児童福祉法上「子ども」の定義に入る利用者の方もいらっしゃいますが、それにしてももう少し成人の障がい者に対する勉強も必要ではないかと思います。いや、そもそも生活支援員の要件自体に資格が不要、つまり何の専門性もなく支援ができる仕事だとみなされていることについて、個人的には不満がありますが、これについては一度腰を据えて調べてみたいと思っています。

いずれにせよ、それだけ保育者の働く現場は多種多様であり、またさまざまな場所で活躍できる仕事である事を知り、それらに共通する保育の理念や保育士の職業倫理は何か、という事に気づく大切な実習が「保育実習Ⅰ(施設)」であると考えています。

とはいえ、ほとんどの学生はそれまでの人生で一度も触れたことのない場所に行くのですから、未知の場所に飛び込むことが「怖い」と感じるのは当然の反応であるともいえます。

この際、怖いという感情を持つ事はもう仕方がない、と割り切って、しかし少しでもその恐怖が和らぐように、事前学習のあり方を工夫します。

たとえば私は、以下のような工夫をしています。

数値的なデータに出来るだけ触れる

昨年出版されたハンス・ロスリング著『FACTFULLNESS』という本があります。この本は、2020年度上半期、様々なビジネス書ランキングの第1位をとりました。ざっとまとめると「私たちの思い込みの強さは大変強く、その思い込みが世界をありのままに見ることを邪魔している。事実を正しく見て、正しく恐れ、正しく希望を持とう」という内容です。これはまさに、私が大切にしたいと思っている事前学習のポイントです。

福祉や保育や対人援助の現場は思わず熱くなったり涙が出たり怒りがわいたり優しい気持ちになったりと心が忙しくなりがちで「エモい」エピソードが多く、またそれに突き動かされてこのような仕事に就きたいと思う学生は多くいます。また、世の中にあふれる福祉の対象について書かれた文章、記事、テレビ番組などの多くは、感情に訴えかけるものが多いのです(その方が視聴者や読者に受けるものになるのでしょう)。

ただ、いかんせん感情というのはなかなか取り扱いが厄介で、ロスリングの言葉を借りれば「正しく見ること」ができなくなってしまいがちです。気持ちで走り始めた行動は、気持ちが覚めると止まってしまいます。事実よりも「自分の心にひっかかった、自分が信じたいもの」だけを見る目になってしまう恐れがあります。

こんな時、数値的なデータを客観的な視点から見ることは大変有効です。そのデータ自体を、どこでだれがどんな手法

でどういう意図で集計したものなのか、といったことも含めて皆で眺めてみます。「虐待の4類型のうち一番多いのは何か」「虐待死亡事例のうち、生後0か月で死亡するケースの割合」「保育所待機児童の数、行政と民間団体の統計の差」「施設利用につながった理由のランキング」等、様々なデータを講義などで提示し、一緒にその意味や背景を考えます。

数値自体は、ただのデータであり、温度はありません。この客観的事実に対して、どう考えるのか、一人一人の考えを出してもらいます。講義後のミニッツペーパー(感想や質問を自由に書いて自由に提出できるシート)にそれらを書いてもらう事が多いです。私は講義内容にもよりますが、ほとんどの場合、提出してもしなくてもどちらでも構わない、と伝えています。しかし、フィードバックを密にしていくと、提出されるミニッツペーパーには面白い意見や感想が増えて行くように感じています。

皆で皆の意見を一緒に味わい、考える

受講後のミニッツペーパーのフィードバックを、全体に向けて、密に実施します。もちろん学生には、匿名で全員に公開する可能性がある事は事前に説明済みで、公開してほしくないフィードバックが欲しい場合はその旨を書き添えるように指導しています。

フィードバックは出来るだけ賛否両論、様々な多様な意見を取り上げます。

これにより、学生それぞれが自分の思い込みの沼にずぶずぶはまるのではなく、皆で一緒に、様々な視点から、多角的・多面的に物事を考えることができるきっかけにしてほしいと考えています。

以前、「実習が怖い怖いと思うけど、いったい何が怖いのか」ということについて、皆でこの形式を用いて意見交換をしたことがあります。皆ですり合わせていくうちに、単に怖がるのではなく「怖さの正体」が皆で把握できていき、「怖い、だから、どうするか」という議論になって言ったのが印象的でした。

現場そのものに触れる

しかし何ととっても、実習の事前学習として一番良い教材は、ダントツで「現場そのものに触れること」です。「百聞は一見に如かず」で、現前とした第一次的な情報に触れるわけですから、これに勝る者はありません。子どもと直接触れ合い子どもとのコミュニケーションに慣れる事や、現場を見学させていただき、実際に空気を感じる事が、本当に何よりも勉強になります。

社会的養護の授業で、「最近の児童養護施設の設備はもう本当に一般家庭みたいな形が増えているよ」と言い、どんなに現場の写真を見せ、どんなによくできたドキュメンタリー番組を見せても、現場訪問を終えた学生は皆一様に、

「先生、施設って、本当にお家っぽいですね！」

と、やっと納得したように言います。

「せやから、最近の施設はほんまにお家っぽいとこやでって何度も言うたがな！」

と思わず突っ込みながら、「頭でわかる」段階から「腹落ちする」段階になったことをこっそり喜びます。

しかし、今年は…。

こんなところにもコロナの影響が出るもので、実は今年度、もうすぐ初めての実習に向かう一年生が経験するはずだった、施設見学や子ども相手のボランティア、子どもを招待してのイベントなどが根こそぎなくなりました。実習事前学習の一番の教材である「現場そのものに触れる」のチャンスが、全くなくなってしまったのです。

私たち教員が「数値的なデータに触れる」「皆で皆の意見を一緒に味わい、考える」という教育をどんなに実施したとしても、どうしても足りない部分があるのです。

そこで今年は各実習先に連絡し、「事前オリエンテーション(実習約一か月前に学生が実習先を訪問し、実習内容について打ち合わせる会)の際に、園内・施設内を見学する機会を持ってもらえないか」とお願いすることにしました。お仕事お忙しい中、大変心苦しくはあるのですが…と、各施設におずおず連絡します。

すると、大変ありがたいことに、ほとんどすべての実習先がご快諾くださいました。中には、「もともと、事前オリ

エンターションの際に、施設内を全部見学していただく予定でした！」というところも。

本当にありがたい、うれしい、嬉しい実習先様です。

今年の「実習怖い」はちょっと違う。

今年はコロナの影響もあり、イレギュラーなことも多い中、学生たちは皆、何とか保育実習Ⅰ（施設）に向かおうとしています。いつもの「施設実習が怖い」という思いに加えて、実習中の空き時間の過ごし方に制限がついたり、実習前の体調管理に例年以上の配慮が必要だったり、緊張の強い実習になりそうです。「怖いなら怖いままでいいから、弱いな

ら弱いままでいいから、やってみましょう。実習先の方も、養成校教員も、皆応援しているからね。」

とにかくそう伝えて、可能な限りの感染症対策をしっかりと、そしていつものように背中をおして、送り出そうと思います。

引用文献)

厚生労働省雇用均等・児童家庭局長「保育実習実施基準」『指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について』平成30年